第五篇　宗教家

第一章　仏教

最澄

（七六七～八二二年）

の東を限るの東方に

女帝の元年、八世紀

十二歳にしては出家

まず学びしは

次にはの弟子により

修得にとりかかる。

九歳にしてを受け、僧となる。

奈良の僧界も俗界も軽薄なるを見

日枝山に草庵を造り、救世の大願を起す。

天皇側近の僧、最澄のに注目

かくて最澄は天皇と相照らし

政教って遂には

国家の精神的革新の機運を約す。

彼は天台の「、」に感嘆

二三年七月、四隻の船し

最澄の第二船は九月明州に着港。

彼は天台教学を体系的に体受せんとて

の天台山に向う。

及び行満に学び

この両者から正統天台のと

戒の伝授にる。

在唐八ヵ月半で帰朝

の書籍二三〇部、四六〇巻。

桓武天皇の後

大同五年（八一〇）の春

彼はで・・の

三経の講議を開始。

諸法、現象即実在認識の

の境に到達し

全山を学山となした。

に日本中世文化の源泉は

比叡山と相成った。

顧みれば延暦七年（七八八）

二十二歳のとき彼は草庵に

を。

これが比叡山寺の創始であり

やがて日本仏教の

根本中堂とうべき歴史的存在。

さらば最澄の

根本中堂の内実は何か。

中堂は中道にして

中道の中心は慈悲心に他ならず。

万物を融合せしむる神秘の力は大慈大悲。

これはキリストの天父のさが

大愛なるに照応。

ダンテはその神曲の終句を

「もも動かし

らしむるものは愛なり」

とし

ゲーテは「ファウスト」の終句を

「永遠の女性（愛）

我らを引きてかしむ」

と結んだ。